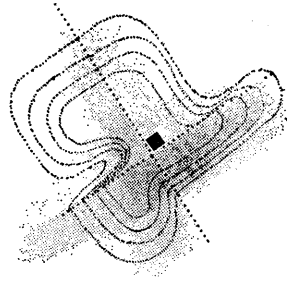


## 幼稚園さまざま



木原 溥子

現在は幼児教育に関する研究発表や論文の数が非常に多く、最近のこの分野の進歩のありさまを感じさせられます。また保育雑誌には現場のすばらしい実践記録が掲載されていて、幼稚園の教育が熱心な先生がたによって支えられていること、また、園児たちは幼児期のよい経験をしているなあということなども感じさせられます。しかし、熱心にまじめにとりくんでいる幼稚園が多い一

方では、あまり書かれることもないもやもやしたもの、子どもたちのためにより保育をしようとはりきってこの道に入った先生がたを戸惑わせるものをもっている幼稚園のあることも否定できません。また新しいことをどこかではじめると周囲の幼稚園がみなマネをする、自分の幼稚園の特色を出そうとして違うアイデアを実行しはじめると、それがまたまねされて流行になる、そこへ商

業主義という波がかぶさって幼稚園同士のものまねとか流行がたいへん盛んになるようです。幼稚園はまさに色とりどりで水準も質もまちまちですが、日本の学校教育の中では幼稚園がもっとも自由がききます。この自由がきくという特長をもっと有効に使いたいと感じさせられます。

それから私が直接、間接に見聞したいくつかの現場の問題を実例をあげて考えましょう。

## 1 理論を信奉する幼稚園

倉橋惣三の「幼稚園雑草」の中に「幼児の教育者」という章があり、その中に「子どもから学べよ」という一文があります。そこにフレーベルのこと、モンテッソリーのことなどが書いてあります。「フレーベルの彼の教育的創見は……一つには彼がよく子どもに学んだ結果であるといえる。幼稚園教育の第一原理たる、『自己活動』の原理論は、フレーベルの頭から織り出されたものでな

く……、ただよく子供から学んだのである……。その教育方法として用いられた遊戯でも手技でも、万至色々の教育玩具でも、いづれも子供から教えられ、子供自身の生活から思いついたものである」云々……。

「この頃多くの人の注意と敬服の的となっているモンテッソリーの教育意見及びその考案なるものは……よく子供に学び、子供の教うる通りを忠実に実行したところにある」（現代かなづかいに変えた）と述べておられます。

幼稚園雑草の初版は昭和23年7月ですから30〜40年前のことになります。今日とは時代も変わり人も変わりましたが真髄を理解した上で実行しよう、信奉しようというあたり、今も30〜40年前も同じだと思います。

一例ですが、ある幼稚園では誰かえらい人の講演会がありますと、それを聞いた園長さんが共鳴したのでしょう、間もなく「この園の方針は誰だれさんの理論で致しましょう」と宣言します。クラスで子どもを担任する先生は目をシロクロして、あわててその勉強をするとい

うことになるようです。やるならば十分に研究消化して  
からとり入れたいのですが、どうも目新しさを追う風  
潮、子ども不在の風潮を感じてなりません。子どものた  
めの幼稚園ですから、子どものために意義があるのか、  
効果があるかどうかなどの吟味を先生がた皆さんで重  
ねてからにしたいものです。とくに現代は幼児教育の論  
議もさかんです。いろいろな意見もありますし、また保  
育観も人により違うこともあります。しかし十分な理解  
なしにそれらの理論をうのみに保育の現場に導入されま  
すと、担任の先生も困るし、一番迷惑をうけるのは子ど  
もであることを忘れてたくないものです。

また最近では発達理論の研究もすすんできました。例え  
ばピアジェが子どもの思考を調べるために行なった実験  
が保育の現場に導入され、ピアジェの数の指導の研究会  
が各所でひらかれております。思考をのばす保育として  
用いられているようですが、ピアジェはそうは言ってい  
ないという批判もあります。熱心に研究会を開いて勉強  
するという姿勢はとてもよいことですし、それが子ども

のために役立つならば、すばらしいことです。しかし十  
分な勉強、吟味、消化なくして、形だけ何でも性急にと  
り入れる傾向がないとは言えません。ともすると何かに  
偏りがちな現代には、絶えず反省も必要ですし、ふもと  
どまる勇氣も必要と思われれます。

## 2 指導過剰型幼稚園

近頃、幼稚園では「教育」ということばのもとにいろ  
いろと教えこむ内容が多くなったり、子どもに指示した  
りすることが多くなつたような気配を感じます。これは  
注意しなければならぬことと思ひます。

ある幼稚園で見聞したことですが、新しい先生が、朝  
の自由遊びのときに子どもから、「先生、きょうは何をし  
たらいいの？」と聞かれました。「好きなようにしてい  
いのよ」と答えましたところ、「先生、何をしたらいい  
か教えてよ、その方が僕、らくだよ。でないとなんして  
いかわからないんだもの」と言われたそうです。日頃、

教えこむ方が多い保育をしているとついつい、自由遊びまでも先生が指図をしているのかもしれない。ある先生は「教師が言った通りに子どもは動いてくれるし、直されればそのように動く。しかし、これでいいのかしら？」と疑問になる。好きなようにさせたいと考えたときにも『これしていい？ このようにしていいの』と聞きにくる。これでは自分で考えて行動することができなくなってしまう。日頃、教示や指示、命令の多くなっている自分を反省しています」と話しておられました。

アメリカの母子のコミュニケーションの実験ですが、親が命令型の多いタイプほど子どもの概念形成のレベルは低いという結果がありました。幼稚園教師と子どもの間にも参考になることと思います。

また教えこむ内容がふえてきますと、それだけで子どもでの自由な活動はせめられてしまうのですが、あるところでは遊具もいらぬのではないか、ひとつ試してみようというわけで、保育室の遊具を全部片づけてしまったということもありました。「何をしたらいいの？」と

教師に聞きにくるので、先生は返答に困ったそうです。でもそこは子どものこと、やがてその部屋の中でテレビのスターのポーズのまねなどして遊びはじめたようです。戸外ならば、砂（土）と水（できれば太陽が出て）があれば子どもは遊ぶことができますが。

### 3 各種学校型幼稚園

絵の先生、体操の先生が週に1ないし2回ほど幼稚園にきて指導するというところがふえてきています。専任職員で常時いる場合もありますが、非常勤でその曜日、時間だけ来て指導なさる場合には、その日の保育の流れを考慮する必要があります。このようなケースが多くなってきただけに、このようなときのマイナス、プラスを検討してみるとよいのではないのでしょうか。

ある幼稚園では、体操の先生が週2回みえるそうですが、子どもたちはたいへん喜んでるそうです。実を言うところこは極端な安全主義の幼稚園で、スリ傷一つでも

大げさに心配するし、階段ポンととび下りることも「あぶないからいけません」と禁止されています。ところが、体操の先生が指導する時間はその先生に任されているので、子どもたちはこの時ばかりは身体を思いきり動かすことができます。担任の一人は「子どもたちにはエネルギー発散の場となっているので、子どもたちのためにこれは容認している」と複雑な顔をして話してくれました。ちょっと本末転倒の話で、まじめに追求するとこじれそうですが、こんなところに現実の担任教師の悩みがありそうです。プラス、マイナス両方の面が考えられます。

また別の幼稚園では、周囲が自然環境に恵まれ、動く場所は十分ありますし、先生たちも平常保育に意欲的で、教材も遊具もみな手がけるほどの力を持っており、元気がいっぱいです。しかしそこにも、曜日をきめて体操の先生が来られます。その日は、朝登園した子どもは園内をただブラブラして待っていて、何とも、もったいない朝の一ときなのです。このくらいの幼稚園ならば、体

操の先生がみえる直前まで遊んで待っていることができずのに、それがないので、「今日は体操の先生が来る日だから遊べないよ、遊びたいなあ」と母親に話しているかもしれません。子どもは本来、自分から遊ぶものですが、ただブラブラしているのは、子どもの生活の場としては不自然と言えます。

ある新設園の入園要項には宣伝になるようなことがズラリと並んでいます。「体育の専門家の指導による健康教育、絵の専門家による指導、音感教育に力を入れること、文字、数の指導をすること」など、幼稚園というよりも「〇〇教室」という看板の方がふさわしいようなことが書かれていました。園児の数が減少する時期で、経営上の御苦労も多いことと十分お察し致しますが、隣りがやっていることはうちでも、という気持ちでなくて、もう少し、幼児教育本来の姿をうち出してもよいと思えました。

以前に、園児が集まらないので閉園を考えていた幼稚園がありました。そこは園舎も子どもが活動しやすいよ

うによく設計されていましたし、子どもをたいせつにする幼稚園でしたから、経営上の理由で閉鎖するのは非常に残念だ、と友人のN先生は考えました。機会があったのでその幼稚園に行き、地域や園児の親たちに、こういう幼稚園こそたいせつにしたい幼稚園だという話をなされたそうです。その親たちは熱心に聞いてくれました、翌年からは園児も集まり、運営の体制を少し変えて今も存続しております。この苦境のとき別の幼稚園の方から、「文字や数を教えると宣伝すれば園児は簡単に集められますよ」と言われたそうですが、それをとらずに、本来の幼稚園の姿を説いた結果、苦境を脱したというすばらしい実例でありました。

#### 4 小学校予備校型幼稚園

小学校の教育課程の一部を先まわりして学習する代表は、文字や数でしょう。幼児一人ひとりの興味や好奇心にあわせて指導がなされるならば問題はないのですが、

一律にどの子どもにも、という形になるから、どうしても是非かの論議になってしまいます。

実を言うとある幼稚園では、かつてその地域の園児が急増したときがあり、たくさん園児が同時に園庭にでると狭くてぶつかってしまうのです。そこで各クラスが交代で園庭で遊ぶことにして、半分は室内で過ごすことにしました。そして室内では十分遊べないので、何か一斉にさせることにしましょう。ということから文字を教えることにしました。ちょうどワークブックがあったのでそれを使うことにしたところ、やめられなくなりました、ということでした。当初、施設の制度から始まった文字教育でしたが、親の希望やらワークブックの売りこみなどで、内容も次第にエスカレートしがちです。

別のある幼稚園では、同じようにはじめましたが、ワークブックの利用の仕方が子どもの実状にあっていないことに気がついて、自由遊びの中で好きなとき好きなように興味に合わせて使えるようにしたということでした。賢明な幼稚園だと思いました。

本誌の愛読者には御存じの方も多と思いますが、黒田実郎氏らの漢字指導の調査結果があります。4歳および5歳のときからそれぞれ漢字教育をうけてきた5歳児と、うけなかった5歳児について50字の漢字テストを5回実施したところ、この時点では効果があつた。しかし、卒園後約1年半後になって、以前の50字に字追加して100字について調査したところ、学習してきた方が50.4%、指導をうけなかった方は48.9%というわけで、その差はほとんどなくなつていたということです。この結果に対して考えさせられることはありますが、いずれにしても早教育は一人ひとりの発達にあわせて考えたいと思います。最近では、漢文まで教えているところがあると聞いております。

余談ですが早教育については私が忘れられない滑稽な古い話があります。かつて早教育論がはやかだつたアメリカでは、10年の間に、文字教育は3歳からが2歳からになり、いや1歳8か月からできます、と次々にエスカレートし、ついに文字教育は胎児から、と大まじめに

言う人があらわれる始末でした。これはいけないとある時気がついて、早教育に対する反省が行なわれたという今では信じられないような笑えない本当の話です。日本ではまさか、と思ひますが。

## 5 過干渉の安全型幼稚園

近頃では入園した子どもが30cmの高さもこわがつて降りられないと驚かれる幼稚園の先生がいるかと思えば、幼稚園側が「あぶないからいけない」と階段一段とび降りるのも禁止してしまう幼稚園もあります。事故でもあつたら大変ですし、もののはずみということもあるので十分注意はしなければいけません。安易な安全教育は子どもの生のエネルギーを育てることができません。子どもにとつて多少の冒険や未知との遭遇は、生きるよろこびを感じさせる貴重な刺激です。子どもの生命のエネルギーを不完全燃焼に終らせないようにすることは、将来のためにもたいせつなことと思ひます。

幼稚園の中には極端な安全型に対して、かなり冒険的な幼稚園ももちろんあります。周囲の自然をふんだんに活用できる幼稚園の多くは、毎日のように裏山にのぼったり、海岸や河原を歩いたり、木に登ったりなど、大いに子どもたちのエネルギー発散の場になっています。それができない都市の幼稚園でも、場所をみつけては散策したり、また、道具を使わせるなど、安全に気をつけながら日々の活動をいとなんでいるところもあります。

※ ※ ※

それぞれこの幼稚園も懸命の努力をしておられますが、幼稚園が多様化して、担任の思うようにならないことがふえています。幼稚園同志の研究会もますます必要でしょうし、またそれぞれの教師が子ども一人ひとりを理解して育て、自らも育ち、そして幼稚園が幼児教育本来の姿にたちかえることを望みたいと思います。

(洗足学園短期大学)

